2009年12月12日（土曜日）

THE BOOK REVIEW PRESS

図書新聞

2945号

「記録に残らない歴史」を紡ぐ

写真という視覚的なコミュニケーション・メディアを介した移民研究の可能性を考える書としても面白い

南川文理

ニューカレドニア島といえば、映画『太陽にいちばん近い島』をはじめとする「楽園」や「リゾート」のイメージで語られることが多い。だが、この島に、20世紀初頭に日本人が移住し、いまも現地に「日系人」が住んでいるということを知る人は少ないだろう。ニューカレドニアの日本人移民の歩みは、南洋の島々を巻き込んだ太平洋戦争によって大きく翻弄された。この島は、戦場にとならなかったものの、記憶の子どもを除く在住日本人は「敵性外国人」として逮捕され、オーストラリアの収容所へと強制された。戦争終結後、収容された日本人は日本に強制送還され、その後ニューカレドニアに戻った者はわずかであったという。合衆国本土やカナダの日系人・日本人が強制収容されたことはよく知られているが、戦争は、移民たちが必死に築き上げた生活基盤を根底から覆し、その家族を引き裂いた。

そして、残された妻や親族の「日系二世」たちは、夫や父親の消息をつかめないまま、戦後を生きることとなった。

写真作家の著者は、本書を通して、ニューカレドニア日本人の移住の歴史を、1905年に沖縄からニューカレドニアに移住した比嘉伝三の数奇な生涯とその家族の物語を中心に描き出している。すでに島の移民一世全員が他界してしまった現在、その「記録に残らない歴史」を紡ぐために、著者は、比嘉の娘セシルをはじめとする「日系二世」たちへの聞き取りを重ねた。そして、著者による写真作品、家族の物語、残された品々に、日本人移民の歴史を重ね、太平洋をさまよう移民の「マブイ」（沖縄で「魂」を意味する）のゆくえを捉っている。

なかでも印象的なのは、伝三とその友人松田幸三郎と、伝三の妻ローラとのあいだで交わされた手紙である。松田はローラからのフランス語の手紙を、そのまま手帖に書き写していた。沖縄に住む松田の遺族が保管していた手帖は、著者を介して、はじめて伝三の遺族の手に渡る。一人の移民の手帖が、導く離れた地域に住む人々の移住の記憶を結びつけ、戦争時に引き裂かれた家族の物語を再び紡ぐ。本書の第3章には、11通の手紙の日本語訳と、書き写された手紙の写真が掲載されている。手紙とはきわめてパーソナルなメディアであるが、そこから、沖縄とニューカレドニアの人々が生きた戦争の時代が鮮明に浮かび上がる。

戦争に翻弄された家族が紡ぐ物語は、「移民の歴史をいかに語るのか」という問いを突きつけるものだ。日本から海を渡って様々な土地に移り住んだ人々の経験は、各地域における「日本人」移民という集合的なアイデンティティのもとで語られ、その「苦難」「栄華」「成功」の物語も、「在外日本人」という集合的な主体の経験として解釈されがちである。しかし、現地の「大酋長の娘」ローラがフランス語で交わした手紙や、セシルら「二世」に語った言葉が描き出すのは、ある移住者が移住先でつくった一つの家族の姿である。そこには、「在外日本人」の経験として一般化することを躊躇させる力がある。同時に、手紙や家族のなかの語りは、沖縄からの移住や島での労働、太平洋戦争と強制収容、そして島に残された家族にとっての戦後という、多くの移民に共通する体験も浮き彫りにする。移住者の歴史は、「民族」や「国家」のような単合的なものに回収させる誘惑に常に直面するものであるが、本書は、そのような集合性の誘惑を退みながらも、移住者とその家族や子孫たちをゆるやかに、しかし深く結びつける独特な心性の存在を鮮やかに描き出している。

沖縄からニューカレドニアへという「島嶼」地域間移動の歴史的文脈をはさらに掘り下げる必要があるようにも感じたが、本書の魅力は、そのような移民史的な問題枠組よりも、著者とのかかわりを通して、ニューカレドニア移民の末裔たちが自分の家族の記憶と向き合う過程にあるように思える。写真という視覚的なコミュニケーション・メディアを介した移民研究の可能性を考える書としても面白いのではないだろうか。

（神戸市外国語大学）

▼津田睦美 文／写真『マブイの往来――ニューカレドニア日本「引き裂かれた家族」と戦争の記憶』3・30刊 A5判 一八〇頁・本体二二〇〇円＋人文書院

定価240円
（本体229円）

発行 図書新聞©